

天部像の系譜についての一考察

杉 山 二 郎

はじめに

一昨年から今年にかけて奈良東大寺、南大門の仁王像の解体修理が行われて、種々の新知見が発見されもし裏付けられもして、多くの学者研究者の興味と関心を引き惹いた。それらが東大寺別当次第や東大寺統要録などの記載記事を書き添えて、復興造営の立役者たる大勸進職の重源上人を中心に、大仏師運慶や快慶、湛慶や定覚らはもちろん、結縁した夥しい人びとの名前も判明して、その氏族系譜から信仰のあり方も考察されようとしている。

南大門や中門が寺院伽藍配置のなかで、僧尼はもちろん、堂上貴紳から一般衆庶にいたるまで、出入することができ、その両脇に普通、密遮、金剛二力士、一般に仁王像と呼ばれる像が安置されている。上半身が裸体で簡単な裳褌をつけるのみで、両脚も腕を露わにして、阿吽二型に従って大きな口を開いて怒号し、憤怒を込めて鼻孔のみを開いて口を閉ずる姿で表現されている。こうした守護神のルーツを辿るとすると、仏教美術の造形表現の際に、当時バラモン教、またヒンドゥー社会のなかで信仰されていた護法神らを、何らかの形で借用し、利用した跡痕が認められる。

彼らの職掌やら機能がどの様にして仏教世界のなかに受容消化されたのかは、多くの面白い問題を孕んでいると言える。仏教とヒンドゥー教、バラモン教との比較研究の材料の一つとして、こよなき題材と考えられる。

そこで今回、これら天部像の仏教美術への参加が、いついかなる状況の元で惹ったのかを訊ね辿ってみたいと思つて筆を執った。もちろん、天部像の全てに言及するつもりはない。普通に護法神、守護神と呼ばれる仁王像、四天王、八部衆、十二神將、十六善神を逐一網羅するのではなくて、天部の原像から先ず始めてみたい。

一、原始仏教のなかの天部像の位置

仏教の開祖ゴータマ・シッドハールタの八十歳の生涯は、哲学的思惟の追尋とその実践に終始して、和辻哲郎博士がいみじくも喝破したように「原始仏教の実践哲学」（初版、昭和二年二月、改訂版、昭和十七年三月、岩波書店刊）の鉢現者だった。遊行説法に多くの弟子達また信者達が同伴囲遶していたらうことも当然であった。彼の教説には一種のヒンドゥー社会の在り方に批判の眼差で攻撃する、新興思想家としての情熱もあり、挑戦者としての身振りもあつたろうから、論敵も多く、既成体制に安住する宗教者ないし支配階級も当然いたに違いない。かの中国の儒教思想家の祖である孔夫子も、春秋戦国の覇王の許を遊説して治国政策を献言して、その弟子たちの就職を世話した（宮崎市定「東洋史上に於ける孔子の位置」アジア研究第一、一九五七年、同朋社刊、四二頁）。「孔子の当時には社会も相当に進み、身分の高い貴族の子弟もその地位を保つ為には教養を必要とし、下層階級の貧者は猶更、有用なる技能を修得して主君に召抱えられ、或は更に重く登用されんが為に、良師を求めて教を乞うた。孔子の弟子が論語の中で時々、禄を干むるを問うというのがそれである。又魯の君主などが時折、孔子に弟子の人物を質問し、孔子も

間々弟子にその抱負を尋ね、弟子が之に對して未來の政治家としての経論を述べている所などがある。實際に孔子は弟子の就職の幹旋をもしてやったのである。」がそれである。孔子が魯を中心に諸国を遍歴したのは、政治思想の實踐の場を霸王の間に見出そうとし、弟子たちの幹旋周旋した姿には、激越な社会矛盾への挑戦はみられない。有名な子曰、鳳鳥不至、河不出図、吾已矣夫。（宮崎訳「子曰く、瑞兆の鳳凰もやつてこないし、黄河から吉兆を背負った龍馬も出てこない世になった。という諺があるが、實際そんな時代になつたらしい。いよいよ絶望かな。」論語の研究）一九七四年六月、岩波書店刊、二五〇頁）にあるような嗟嘆は時にあつたらしいが、新宗教樹立といった情熱の吐露はなかったと言つてよいだらう。戦国期の社会不安が時として孔子を襲つて、匡人から迫害暴力を加えられかけたことや、桓魋が孔子を殺そうと計つたこと、「子曰於畏、匡、文王既没、文不在曰茲、天之將乎喪文世、後死者、不得与於斯文也、天之未斯喪文也、斯人其如予何。」「子曰、天生德於予、桓魋其如予何。」から窺われるが）その予防手段は弟子の臂力に秀でた子路の防禦くらいと考えられるに過ぎない。

わたくしが略同時代の実践倫理学の唱道者として、中国の孔子を挙げたのは、ガンジス河農耕帯に勃興した都市国家を中心に遊説遍歴したシャキャムニ一行の姿を二重映しに見ているからである。その当時のインド社会の姿は、中村元先生の「インド思想史」（昭和五十六年二月、岩波全書）第三章都市の発展と自由なる思索の出現、として次のように触れておられる。

「まづアーリア人と先住民族との混血が盛んに行われた。ここに形成された新たな民族はもはやアーリア人の伝統的な風習儀礼を忠実に遵守しようとはしないで、自由に恣ままにふるまつた。かれらはヴェーダ文化を無視し、アーリア系の崩れた俗語（Prakrit）を使用していた。かれらの定住した地方は地味肥沃で多量の農産物を産出したために、かれらの物質的生活は豊かであった安易となり、物資が豊富になるとともに、次第に商工業が盛んになり、多数の

小都市を成立せしむるに至った。最初はこれらの小都市を中心に群小国家が多数併存し、そのうちの或るものは貴族政治或いは共和政治を行っていたが、それらは次第に国王の統治する大国に併合されてゆく趨勢にあった。大国の首都は繁栄し、そこには壮大な都市が建設された。当時はコーサラ (Kosala)、マガダ (Magadha)、アヴァンティ (Avanti)、ヴァンサ (Vansa) の四国が最も有力であった。これらの大国においては主権がいちじるしく振張り、王族は人間のうちでも最上者と見なされていたが、バラモンは従前ほどの威信をもっていなかった。また諸都市においては商工業が非常に発達し、貨幣経済の進展とともに莫大な富が蓄積され、商工業者たちは多数の組合を形成し、都市内の経済的実権を掌握していた。『たとい奴隷であろうとも、財宝・米穀・金銀に富んでいるならば、王族もバラモンも庶民もかれに対して、先に起き、後に寝、進んでかれの用事をつとめ、かれの氣に入ることを行い、かれには快いことばを語るであろう。』(M.N. vol. II, p. 85) 旧来の階級制度は崩壊しつつあった。他方物質的生活が豊かに安楽になるにつれて、ややもすれば物質的享楽に耽り、道徳の頹廢の現象も漸く顕著になった。

こういう空氣のうちに生活する人々の眼には、旧来のヴェーダの宗教は単なる迷信としか映じなかった。新しい時代の動きに応じて、唯物論者、懷疑論者、快楽論者などが輩出して議論を闘わせた。また他方では享樂の生活に倦怠を感じ、出家して禪定に専念する行者も多数現われた。この時代に出現した新しい思想家たちを、つとめる人々 (śramaṇa, samana, 沙門) と称する。かれらに好都合なことには、当時は思想の自由及び発表の自由が極度に容認されていた。(前掲書、三七—三九頁)

これらを更に詳細に唯物史觀の立場で論じたのが、東ドイツの Walter Ruben 著 *Die Gesellschaftliche Entwicklung im alten Indien*, Bd. I. Die Entwicklung der produktions Verhältnisse, Bd. II. Die Entwicklung von Staat und Recht, Akademie-Verlag, Berlin, 1967, 1968 であり、先生の論旨のなかにも生か

れている。

一方インド人の古代史家コーサンビー D. D. Kosambi: *The Culture and Civilization of Ancient India in Historical Outline*, 1964. 山崎利男訳「インド古代史」(昭和四十一年十一月、岩波書店刊)第五章部族社会から階級社会、三、ブッダとその社会には、彼シャキヤムニの活躍した社会の姿を、仏伝資料や原始仏典、考古学資料を通じて活写している好文献の面目がある。¹⁰⁾

「ブッダはシャカ族という階級未分化のクシャトリヤの小部族のなかで生れ、ゴータマと名づけられた。「シャカはサンスクリット語ではサキヤ、パーリ語ではサッカと綴られ、ゴータマという名は後世に信者によつてシッダルタと改められた」シャカはアーリヤ語を話し、アーリヤ人と称した。(中略)かれらがヴェーダの祭式を行ったという記録もなく、この部族内のバラモンやカースト階級があったという記録もない。シャカ族は必要とあらば武力をふるったクシャトリヤであつたにもかかわらず、農業に従事しており、ブッダの父を含むシャカ族のすべてはスキを手にしていた。さらに、その領域以外に若干の商業植民地(ニガマ)をもつていた。シャカ族では首長は交代制で選ばれた。このことから、ブッダが王子として生れ、壮大な宮殿できわめて上品な楽しみのなかに生活したという作り話が後世に生れた。(中略)

シャカ族の小さな領域は、今日のウツタル・プラデーシのバスターイーとゴラクプル両県に沿った、ネパールとの国境地帯の両側にまたがっており、当時は原始的であまり発達していなかった。シャカ族に隣接して住んだコーリヤ族は、ブッダの教えを聞き、ブッダの遺骨の分配を要求したといわれる。しかしながら、コーリヤ族の多くはシャカ族よりも原始的な段階の部族生活をしており、コールという木を部族のトーテムとし、ある人々は別に雄牛のトーテムの儀式をおこなっていた。それ故、コーリヤ族は全体としてしばしばナーガ族という総称でよばれた原住民の列に

加えられた。シャカ族がかれらとロヒニー川の水利をめぐる戦ったとき、アーリヤ人の間での戦争規則に反して、その川水に平気で毒を入れたのは、かれらをアーリヤ人と認めていなかったためである。また、ブッダはルンビニという地母神に献げられたサーラ樹の森で生れ、その直前に母のマーヤーがその森の隣にあるシャカ族の神聖な人工の蓮池^{カワ}で水浴びをしている。サーラ樹はシャカ族のトーテムの樹であって、マーヤー（ブッダの誕生後一週間もたたずに死んだ）は、当時おこなわれていた慣習のすべてを遵守したのである。（中略）

ブッダの生涯に冒険や危険がなかったわけではない。たとえば、南山地方^クヤマトウラー近くは、ヤクシャに対する残酷な祭式がおこなわれており、それは、よそ者を捕えて謎をかけその答が不充分なときには犠牲に供するというものであった。ブッダは、あるヤクシャ（おそらく人間として顕現したもの）に対する祭式を血を流さない犠牲に変えさせた。（中略）マーガンディヤというバラモンはカーストの規制やブッダ独身の誓を無視して、かれにその美しい娘を結婚させようとしたが、これを拒否された。このため、この娘はかれを終生の敵とし、のちに王子と結婚して復讐を試みた。また、競争相手の宗教者から虚偽の告発をされたり、健康な男は農業や他の生産的な職業に就くべきであると考える人々から軽蔑を受けた。さらに、ブッダのシャカ族の従兄のデーヴァダッタは、出家者に対して社会との接触を一層厳しくする戒律を求めたが、これがブッダによって拒けられたので、彼を殺そうと企てた。このためデーヴァダッタは仏教徒から非難されている。アングリマラーという残忍な盗賊は、捕えた旅人をみな殺すほどの無法者であったが、ブッダを脅かそうとして失敗し、回心して教団に加わり、修行者として安穩に生涯を終えた。」（前掲書、一六五—一六九頁）と言っている。

これらブッダの生涯を彩った暗殺の危険や遭難は、六師外道といわれたマッカリ・ゴーサーラ *Makkhalī Gosālā* B・C・三八八年ごろ歿の属するアー जी विका教 *Ājīvika* が、中村元先生によると、「元来は生活法に関する

規定を厳密に遵法する者^々の意味であるが、他の宗教からは貶称として、生活を得る手段として修行する者^々の意味に用いられ、漢訳仏典では^ク邪命外道^{じやもうぎだう}と訳している。マウリヤ王朝時代までは相当有力であったが、その後ジャイナ教の中に吸収された。」（『インド思想史』前掲、四二頁）かなり仏教に対して敵対意識をもっていたらしく、中傷迫害の中心勢力だった節がうかがわれる。渡辺照宏氏の「新釈尊伝」（昭和四十一年二月、大法輪閣刊）の「邪惡な迫害」の項に、六師外道のなかの教団の姿を次の様に伝えてくれている。

「仏陀はゴースアラについて次の如く言われたと記されています——

クマツカリ・ゴースアラは多くの人を破滅させる。あたかも河口に網をはってすべての魚を捉える漁師のようなものである。」

これはその教義が誤っていることを示すと同時に、その宗教活動が烈しいことを表現したものと言えましょう。殊にシラーヴァステイーはその活動の中心地でした。（中略）

人々の心は次第にアージーヴィカ教やジナ教から離れて、仏教に傾いてゆきました。これはそれらの教団の修行者たちにとっては重大問題でありました。市民から受ける尊敬と援助が唯一の生活資源だったからです。（中略）

アージーヴィカ教を含む修行者たちが集るとその対策を考えるようになりました。

それはどの教団から出た話か明らかでないが、それらの修行者の中で心のよくない連中が集って相談した結果、自衛手段としてゴータマ（仏陀のこと）の評判を悪くする策謀をしました。（前掲書三七四頁）

その策謀には「赤い着物のチンチャーやスンダリーといった美貌の女修行者が、ゴータマないしその教団の沙門によつて誘惑され、破戒があった」として喧伝した事例を伝えている。前者は *Ciñca Manavika* で施遮^{せんしや}、旃闍、戰遮と訳され、織田得能師の「仏教大辞典」（昭和十一年一月、大倉書店刊）に、その説話が仏説興起行經二巻の下巻、

(大正新修大藏經第四卷本緣部下、一九七、後漢康孟詳訳)「大智度論」一百卷の卷二、(大正新修大藏經第二十五卷訳経論部上、一五〇九、龍樹菩薩造、後秦鳩摩羅什訳)に載せられ、法顯伝、玄奘「大唐西域記」卷六をも紹介している。後者は梵語 *Sundarī* で、玄奘「大唐西域記」卷六室羅伐悉底国の条に凶賊指鬘の改悔、姪女の謀殺、提婆達多の惡逆などとしてゴータマの危難の事蹟を伝える聖跡に触れている。道德戒律に背いた仏教教団の誹罵の種を、こうした姪女の謀略で造ったことは、ゴータマとしても痛手であつたに違いないけれど、むしろ彼を殺害しようとした殺人常習者の劍、また提婆達多の毒殺、醉象蹂殺といった危険が身近に惹つたことに注目したい。

玄奘の記述によると、

「善施長者の宅の側に大きなストゥーパがある。これは舊實利摩羅 *Angulimāla* (卽中国語で指鬘、旧央掘摩羅といつた訛である) が、邪な心を捨てた所。アングリマールはシユラヴァステイーの凶惡人だつた。生靈を害するため暴城国として、人を殺して指を切取り、首にかけたり鬘に結び着けていた。その数を満すために母をも殺害しようとした。世尊は悲しみ愍み、教化指導しようと思ひ立たれた。彼は遙かにやつて来る世尊を見て窃に喜んで言うのに「吾は今こそきつと天上に生れるだろう。わたしの師匠が教へ遺言してくれたことが今実現でき、仏を害し母を殺せばきつと梵天に生れよう。」と。そして母親には「老もこれまでだが、先ずあの大沙門を殺害しようぞ。」と言つた。そこですぐに劍を杖にして世尊に向つて行つた。如來はそこで徐行して退いた。凶惡人の指鬘は疾駆が速ない。世尊はそこで「どうして鄙志を守つて善根を捨てたのか」と訊ねられた。時に指鬘は悔を聞いて所行の非を悟り、その命に服して仏法に入つた。精勤怠らずに羅漢果を得た。」とある。堀謙徳師の「解説西域記」にこの凶賊指鬘の改悔を考證して、「賢愚經」卷十一、「増一阿含經」卷三十一、「雜阿含經」卷三十八、「舊崛摩經」「髻舊崛經」の所載を言い、さらに錫蘭所伝はハーデー氏の「仏教論」*S. Hardy: Manual of Buddhism*, 244~253) に詳細

な記述があるとして、その梗概^{あらすじ}を掲げている。（前掲書四〇一―四〇三頁）

この譚は、指鬘九十九人、あるいは百九十九人をすでに殺し、残り一人を母としたのを、ゴータマ神通力で察知して教誨したとする点から、万有学の大家南方熊楠翁の着目するところとなつて、「千人切りの話」(『南方熊楠全集第二巻』続南方随集四四五―四五五頁)に細叙されている。「劉宋の世支那へ來つたインド僧德賢^{デヒヤン}所訳^{ジヤン}央掘摩羅經^{ヤクモラキヤウ}によれば、」としてこの物語を紹介しておられる。（前掲書四四九―四五〇頁）

この凶賊が百人切り、千人切りを果すと梵天に再生すると先師に教唆された由が、大唐西域記に見えるが、梵天、帝釈天といったヒンドゥー教の重要な神に再生できるとするのは、まだ仏教徒にとって凶惡な外道神と考えられていた証拠と言つても良いかも知れない。すくなくともゴータマ遊行に守護靈、守護神の同伴していた様子は汲みとれないのである。むしろゴータマの駿足が迅くて追いつけなかったとあり、彼の神通力、咒術力、もっと言えば魔法の勝利が主張されている気味があるう。こうした傾向は同じ大唐西域記卷六にある提婆達多の惡逆にも見えている。

「伽藍の東百余歩に大きな深い坑^{おな}がある。この坑は提婆達多が毒藥をもつて仏を殺害しようとして、生たまま地獄に陥^{おち}入つた所だという。（中略）提婆達多は惡心を捨てずに惡毒藥をもつて指の爪の中に入れて、礼をなすふりをして仏に傷付けて殺害しようとした。この謀略を実行するために遠くからやつて来て、丁度ここに到つた時地面が圻^{めりこん}で生きながら地獄に陥込んだのである。その南にもまた大きな坑があつて、嬰伽^{ヨウガ}梨^リ菴^カが如來を毀謗^{そし}したので生きながら地獄に陥ちた所と言う。」

この説話も「増一阿含經」卷四十七に典故がありとするが、毒藥による殺害の危機があつたことを示している譚である。古代インドで毒殺の危険はかなり流布していて、有名な「カウティルヤ実利論」*Kautilya's Arthaśāstra*の帝王学のなかに、政敵をいかに斃すか、また逆に敵の毒殺陰謀をいかに防ぐかが説かれていて興味深い「カウティルヤ

「実利論——古代インドの帝王学」下、上村勝彦訳一九八四年岩波文庫版第十二卷四章武器、火・毒の使用（二六〇—二六四頁）。口腔からでなく皮膚を傷けて毒殺する事例の一つがここに語られているわけで、ゴータマの身边を襲う筈の毒殺を天神が察知して、提婆達多を地獄に陥したとして危機の回避を言っているのが注目される。

仏教が実践倫理学として当時のバラモン教学とまったく違った運動をしていたことは、先に引用したコーサンビーの文章からも知られるが、とくに、

「仏教經典は、カースト、富や職業を無視して、在俗信者の義務を定めている。そこでは祭式についてなんら留意していないし、バラモンの主張や専門化した祭式に対してきわめて巧みにかつ簡単なことばで反対し、よき生活にとって不適切で不必要であるといっている。（中略）ほとんどすべてがブッダの教えや対話から由来すると信じられている經典は、日常のことばによって平易な文体で書かれ、神秘論や長い思弁はない。これは新しい形の宗教文学であって、少数の学識ある出家者や達人だけに限られたものではなく、当時の社会全体に向って述べられたものである。」

（前掲書、一七三—一七四頁）は仏教の特質と教団人の合理的な生活態度のあったことを示しているから、ヴェーダ祭儀やバラモン神学に登場する絶対神、シヴァ神、ヴィシヌ神、インドラ神、ブラフマン神、その他天然自然を司祭支配する神々を始め、卑俗な民間信仰の精霊神などへの言及はなかったのも当然かも知れない。すくなくともゴータマを中心に教団の僧尼を守護するのは自らの智慧であり、合理主義的な態度だったのだらう。彼らの身边にヒンドゥー社会通有の守護神の加護を祈って祀った節は見られないと言ってよい。これを暗示するのは次の文章である。

「そのうちとくに重要なのは、ブッダか、あるいは名をあげてないが、はじめのころの弟子が、絶対的君主に対する新しい義務を敢えて示したということである。すなわち、王は土地からの租税を集めるだけで、人民が盗賊や反社会的分子によって悩まされていれば、王の義務を果しているとはいえない。強盗や闘争は武力や厳罰によっても決し

て鎮めることができない。社会の悪の根元は貧乏と失業であり、これは慈善や喜捨によって片付くものではなく、むしろ悪行に報酬を与え、その上それを助長するだけであろう。正しい解決方法は、農業や牧畜で生活する者に種子や食物を供し、商業で生活する者には必要は資本を供し、そして、地方から搾取する方法を見出さないように、役人に適当な給与をきちんと支払うことである。かくして、新しい富が生み出され、地方が盗賊や詐欺師から免れる。このような生産的で満足すべき環境で、人民は欠乏と不安に悩まされず、安楽かつ幸福に子を育てることができるよう。そして国庫にあるものや個人が自発的に寄附したものを問わず、蓄積された余剰物を消費する最上の方法は、井戸や池を掘ったり、通商路沿いに木立を植えることであるという。

これは驚くほど近代的な政治経済学の見解である。この見解が、ヴェーダの犠牲式がおこなわれていたとき、原始的なジャングルをやっと克服し始めた社会に向って述べられたことは、きわめて高次な人知の遠成である。新しい哲学は自己を抑制することを教えた。そこにみられなかったのは、全人類が個人的必要や社会的必要に応じて自然の恩恵を分配するために、自然を無限に科学的・技術的に支配するということだけだった。」（前掲書、一七三—一七四頁）

二、インド社会の天部像

天部 Devas が仏教のなかで守護神として出現し、ゴータマの遺骨^{サリリー}を埋葬造立したストゥーパの出現と関係があることは、現存遺物であるサンチー、パールフト、ボドガヤー、またアマラヴァティ、ナーガルジュナコンダの浮彫りや丸彫り彫刻の類から推測される。これらの具体的造形作品の造立年代からその意義については、後に詳述したいが、これらの守護神がヤクシャー、ヤクシニー、クベーラなどヒンドゥー世界での卑俗な民間信仰の神々を登用している

点着目しなくてはならない。

仏教図像学 Buddhist Iconography の成立についても、元来インド人がヴェーダ時代以来、超越神絶対神を觀念世界のなかに想定して、シヴァ神やヴィシュヌ神の破壊と創造を司る神格とするには、ベンガル湾に來襲する颶風のもつ猛威と洪水現象の破壊と裏腹に多量の肥沃な土砂の堆積が、計らずも翌年に豊作多産をもたらすことに着目すれば、彼らの神格が作り出されることも可能であろう。そればかりではない。日月星辰、自然現象の数々に人間の知識も及ばぬ働きの活動を注視すれば、そこに信仰対象としての神々の世界が生れてくる。しかも祭祀を司るバラモン階級の成立と社会支配は超越絶対神として神々の宇宙觀を構成して、それらへの犠牲祭儀の執行者としての權威を保ち、奉仕者として神々に直屬する權威と尊敬を獲得し得た。かのカースト制度のヒエラルキーの頂点に位するバラモン階級は、神々の世界の現世的投影であつたと言えよう。彼らの祭祀儀礼と神々への讃歌が、かのヴェーダ文献として残つていて、独占された文学遺産の形で後世に伝えられてきた。

インドの神觀念の発達史については、ヘルマン・ヤコビーの著作があるが、インドにヴェーダ文献を成立させたアーリヤ民族は、紀元前千五百年ごろコーカサス地方から侵入してきて、かの高度な都市文明をもっていたインダス文明人を征服、驅逐した後、自らガンジス農耕帯にヒンドゥー社会を形成したので、原住民が夥しい数いて、いわゆる非アーリヤ民族として独自の文明と信仰をもっていたことを考慮に入れなくてはならない。この点、足利惇氏先生の「印度史概説」（昭和二十九年八月、弘文堂刊）の第一編印度文化史概説、一アーリヤ民族の印度侵入、二古代印度の社会的成立、の記述は頗る示唆に富んでいる。

「今日の印度においても印度世界の地域性に対し未だ印度文化の圏外にある地方があるが、その地域に棲息する民族は印度古代の原住民として知られるもので、ムンダー (Munda) 語、またはコール (Kol) 語を語り、ヒマラーヤ

ヴィンドヤ、チョタ・ナグプル (Chota-Nagpur)、ガッツ (Ghats) 地方に分布している。この言語の系統はモン・クメール語 (Mon-Khmer) に属している (モン語はビルマの古代語、クメール語はカムボジャの言語である。) (中略) 彼らの信仰の対象である悪魔や偶像是ヒンドゥ的神像に、妖術者は婆羅門に、トートテム (Totem) により統合せる種族は種姓の状態を採りつつあるが、この傾向は印度文化の展開の一方式を示すものとして注意すべきである。ステン・コノウ (Sten Konow) 氏は、このムンダー語の島嶼的分散は太古に印度洋に陥没せる大陸の名残の一部であつて、モン・クメール語を語つた種族はかつてヒンドゥスターンの諸平野に占拠し全印度を知つていたのであるが、ドゥラヴィダ及び印欧語種族の人種波濤によりてその姿を失ひ、東部にては、西藏支那人種によつて覆滅せしめられたと説いている。しかし、この原民族が果して全印度に棲息していたか否かは、事実において容易に解決し能わざる問題である。(中略)

ムンダー語系の人種が今日なお印度文化圏外にあるのに対して、非アールヤ民族として印度文化の世界にむしろ一体として、重要な存在を示しているのはドラヴィダ族である。ドラヴィダは Damila より転じたる Tamil 乃至 Tamil を示すものではあるが、この語自身に人種的表現を有しているわけではない。然しヴィンドヤの南部デッカ地方の言語及び住民を指すことには誤りない。この住民は、概して短軀にして皮膚黒くして顔長く、鼻は扁平にして低い特徴を持っている。(中略)

この非アールヤ的民族の活動が文化史的に生氣あるものとして認められるのは、西暦紀元前千五百年乃至千二百年頃のアールヤ民族侵入以前のことであるが、しかし、彼らの侵入者に対する抵抗は、二千年來今日に到るまでの社会的地位によつて実は明らかに証明せられてゐる。アールヤ民族が印度侵入当時において示している社会制度である四箇の種姓 (Caste) の名称と原理とは、むしろアールヤ族にとっては絶えず脅威的な印度社会の同化力に対する民族

的文化的な防禦の一線に関するものと考えられる。バラモン(婆羅門 *Brāhmaṇa*)、クシャトリヤ(刹帝利 *Kṣatriya*)、ヴァイシヤ(吠舍 *Vaiśya*)、シュードラ(首陀 *Sūdra*)からなるこのアールヤ的体制の中、非アールヤ的なシュードラが社会の絶対多数の大衆であったことは当然と見てよい。」(前掲書、三三七頁)

足利先生は先住民文化の一つで紀元前三千年期に高度な都市文明と、泥粘土文化をもっていたインダス文明人をこのドラヴィダ族の文化とする説に躊躇しておられる(前掲書、七―八頁)が、彼らの風貌形姿を窺うに足る考古学発掘遺品から推察しても、手足の柔軟にして細長く、短頭低鼻、黒色人種だったらしいことが分り、かなりドラヴィダ人種の特長を備えている。彼らの使用した文字が粘土版に記載されているが、今日まで定説となった解説がなされておらず、彼らの宗教感情や崇拜した神々の名前も分っておらない。印章には多くのこぶ牛や象、鷲や蛇などの動物のほかに、僅かながら両角の冠をもつ人物像が造形されていて、その神話学的特性について、ジョン・マーシャル卿著「モヘンジョ・ダロとインダス文明」*Sir. John Marshall: Mohenjo-Daro and The Indus Civilization*, 3 vols, Arthur Probstain, 1931. のなかで次の様に紹介している。

「³⁵⁶、³⁵⁷、³⁵⁸の三つの印章板には人物ないし一部人物像らしい表現がみられる。(中略)これらの人物像は蹄、角、野牛の尾をもちそして左腕を頭の上に挙げ、右腕は脇に垂下している。これらの像のいずれもエンキドゥ神に酷似していて、ギルガメシュの相棒の神で、頭も肩も両腕も人間でしかし野牛の双角をもっている。全く同じ人物像が印章³⁵⁷にも再現されて、そこでは怪獣と闘争しているが怪獣の大部分は虎の様に見える。シュメール出土の印章や他の造形物に、エンキドゥは常に獅子と闘争する姿で示され、彼の相棒ギルガメシュは牛と戦う姿で現わされる。しかし恐らくモヘンジョ・ダロで虎が獅子にとって換えられて、獅子は決してこの印章には姿を見せない。この英雄神の背後の樹木表現はきわめて写實的で、非常に入念に扱われ好ましい不規則性を示している。こうした樹木が東方域の殆ん

どこどこでも見出せ、動物によって噛み切られたり、人によって叩き落されるように感ずる程だ。」（前掲書、第二卷、三八九頁）とある。

これらの神像がペルシア湾を通じて商業貿易や交通のあった、初期シュメールの神話中のギルガメッシュ、エンキドゥに似ている指摘は興味深いが、しかしこれらの神々がウェーダ神話中に加わったりしている形迹はないのである。むしろ先に紹介したコーサンビー氏の文に、四、ヤドゥ族の黒き英雄としてクリッシュナ神を扱う条りが示唆するところがある。

「インドのきわめて多数の人々にとって、真の宗教」として二〇世紀まで存続している信仰は、決して仏教ではなく、それとは異質なクリシュナ神に対する信仰である。クリシュナは人格神で、人々が苦しみがあるときにはこの神に救いを求めることができたが、それは人間の教師であったブッダに対してはできないことであった。後世クリシュナの名のもとに形成された教義の多くは仏教から剽窃したものであり、（中略）仏教とクリシュナ信仰はあらゆる点で対照的である。（中略）数多くの神話と伝説とがひとつになって黒色の皮膚をした神として形成されたクリシュナのどの面にも、史実といへるものを見出すことはむづかしい。（中略）

クリシュナはクリグヴェーダでは、インドラ神の敵の魔神で、その名はアーリヤ人に敵対した黒色の皮膚をした先住民の総称として記されている。しかし、クリシュナはクリグヴェーダ時代の五大アーリヤ部族（パンチャ・ジャナーハ）の一つのヤドゥ族の英雄であり、のちに半神半人となった。ここにクリシュナ伝説の基盤がある。（中略）クリシュナがその部族の域を越えて歩んだつぎの話には、地母神が関係してくる。クリシュナは、子供のときにかれを有毒な乳で育てようとした地母神の一人のブータナーを殺した（後世天然痘の女神となったのは、多分この神であろう）。そして、クリシュナを育てた牧牛者の集団はマトゥラーから川を渡ってヴァリンダーヴァナという森に季

節的に移動したか、あるいは永続的に移動した。ヴリンダーヴァナは、一群の女神の森々を意味し、今日でも、クリシュナが神聖なトゥラシー（めぼうき）樹に表象される女神と結婚する儀式が、毎年きまった日におこなわれている。（中略）

クリシュナの地位の上昇に拍車をかけた初期の偉業の物語がもう一つある。それはかれがインドラ神から牧牛者の集団の牛を守った話である。クリシュナとクル族の新しい支族のバーンダヴァ族は機会さえあればナーガ族を打ち殺していたが、インドラ神がそのナーガ族の多くを救っていたから、この話は三つ巴の争いであつたらしい。クリシュナは、マハーバーラタ々には全く無関係であつたが、のちにそのなかに割り込んできた。クリシュナがバーンダヴァ族に加わつてカーンダヴァの森を焼き払つて、デリーの土地を開いたとして、マハーバーラタ々の話と結びつけられたのである。ナーガに関する矛盾の多い物語が、アーリヤ人と原住民との融合における明瞭な一段階であつたのと同様に、リグヴェーダ々にみえるヤドゥ族の曖昧な地位とクリシュナの黒い皮膚はこの融合の一段階を表わしているのであらう。」（前掲書、一七五—一八〇頁）

わたくしはインド社会の下層に沈淪しながら絶対的多数を占めた、皮膚の黒い短頭低鼻のドラヴィダ族の社会的地位とその宗教感情の在り方を垣間見てきた。そしてインダス文明人の半獣半人神エンキドゥ・ギルガメッシュや、クリシュナ神の姿を追尋しつつ、民間信仰として樹精神、トーテム神などの帰趨をも追究しなくてはならなくなつた。ゴータマはその実践倫理の徳目を説き、迷信や邪祠の崇拜を不合理として禁止すらしめたが、彼の遊行説法においては同調者、帰依者はシュードラ階級やヴァイシヤ階級が多かつたこと、新興宗教のもつ宿命の一つといつて過言でない。もちろん、彼の伝記のなかにバラモン出身者が十大弟子中に颯爽と登場し、庇護者にも多くの王族が姿をみせているものの、祇園精舎の布施をした給孤独は航海業の商人だつたし、また彼の臨終の遠因となつた鍛冶工チュンダも、

決して上級カーストではなかった。当時ゴータマの教団を社会的経済的に援助し、同調者となったのは、裕福な下層級に属する人たちと考えられる。ゴータマ生存中は彼の個人崇拜的感情の溢盛によって、彼の教義すなわち法ダルマが遵守されて理想社会の実現に努力したに違いない。けれど、彼の涅槃以後の部派仏教の分裂は、合理的生活や既成体制への挑戦こそエネルギーになっていたものの矛盾の顕現といえる。ゴータマの語録の文字化編集や、彼の生涯の伝記の作成の作業を通じて、信者の心に多くの幻影やら理想化、そして既成宗教がもったと同じ権威主義的な守りの姿勢が産れてくる。ゴータマ個人崇拜が法ダルマといった抽象的なものでなく、遺骨遺物崇拜へと昂るのは自然の勢いであろう。そして造形表現を通じての布教が信者の間に澎湃として湧起してくる。ストウパーの造立とその美術的表現である。

三、ストウパー・パ門神たちの出現と展開

ゴータマの遺骨サスリは有名な舍利八分戦争といった挿話から追察されるように、当時の権力者にとって覚者人格完成者への崇敬や追慕といった感情よりも、一種の Cannibalism (食人習俗) の一変型と見做す視点も垣間見ておきたいと思う。飢餓による食人も地球上到處で行われたが、他方超越的な能力をもった人間、勇者や時として極悪な犯罪者を含めて、その肉体の一部を喰い血液脳漿を嚥んだりすることで、その能力を自己の所有とすることができるといいう一種の信仰である。つまり類感呪術の信仰である。中国における Cannibalism を上古から近世にかけて文献資料を駆使して論及されたのが、桑原隲蔵先生の「支那人間に於ける食人肉の風習」(桑原隲蔵全集第二巻、昭和四十三年三月、岩波書店刊、一五三—二〇五頁)である。そのなかに(四)として憎悪の極、怨敵の肉を喰う場合、(五)医療の目的で人肉を食用する場合として諸例を挙げておられる。未開人種の Cannibalism は大航海以来海洋冒険家や旅行者の

見聞として、人喰人種の汚名を着せて紹介されたが、その誇張と興味本意の噂がどれ程飛び交い増幅されたかは、W・アレンズ著折島正司訳「人類喰いの神話——人類学とカニバリズム——」（一九八二年八月、岩波書店刊）のなかに詳細に説かれている。ゴータマの遺骨分配に Cannibalism の一面があったとすれば、それが埋葬礼拝されたとするより、薬劑が粉末のようににして嚥飲された可能性が色濃い。三国伝来の舍利は元より、アシヨーカー王が紀元前三世紀中期にそれまで分散していた仏舍利を蒐集して、それを八万四千の塔に埋葬したとする舍利の実体がどのようなものであったか、考えてみる必要がある。仏舍利は遺身遺骨の象徴と考えれば、かならずしも肉身舍利である必要はない。仏弟子たちの遺骨や、貴宝石の粉末でも良いわけで、五色の舍利などはその典型と言ってもよからう。

アシヨーカー王が全国の各地に建立したストゥーパは、土饅頭型のもので、玄奘師「大唐西域記」のなかに屢々記載されて、その存在が確かめられるが、現在確証のあるものはごく少い。⁽³⁾ アシヨーカー王治世の仏教崇拜の反動として、マウルヤ朝が崩壊した後成立したシュンガ朝、アーンドラ朝にむしろ仏教を弾圧した気配がある。しかし、現存するサンチーの三つのストゥーパや、今カルカッタ博物館に移れたボールフト建さの門柱欄楯⁽⁴⁾などは、熱烈な仏教信者たちが掘金合力して造った堅牢な石作りの例なのである。ストゥーパの基部から土饅頭型を切石で舗装し、東西南北の四門を設けて欄楯で囲う聖域遺構がはっきり確められている。しかもサンチー大塔の四門にはコンソール部分にマンガー樹にぶら下るヤクシニー Yaksini の豊満優美な媚態を誇示した像や、倭軀太鼓腹のクベーラ Kubera が護法神然として門柱守護の表現がみられるし、またボールフトの門柱には、浮彫りでヤクシャ yaksa、ヤクシニー yaksini がまさに門神として造型表現されている。彼らが樹精神として、また財福神として民間信仰の立役者で、病魔や飢饉、洪水その他の災害の回避と幸福招来の祈願対象物であり、おそらくインダス文明の粘土芸術のなかにも地母神、地霊神として数多く造形されていたものの後裔たちと言えるだろう。インド人美術史家アナンド・クーマラスワミー

Ananda Koomaraswamy; *Yakṣas*, 2 vols. Smithsonian miscellaneous Collections. 1928, 1931. の「ヤクシャ神研究」は、これらの問題を分析した好文献である。その一部を抄訳するが、いずれ解題批評を試みたい。

「ヤクシャの語が初めて Jaiminiya Brāhmaṇa (III. 203, 272) にみられるが、しかしながら「不可思議なる者」以外何ものをも意味しない。「精霊」守護神の意味で、普通のクベーラ（ヤクシャ神の指導者）と組んででは *gṛhya sūtras* 時代以前に姿を見せていない。この經典でヤクシャ神は大小さまざまな神々の非常に神秘的な数多くの軍勢らと一緒に顕現し、ヴェーダ研究時代の終りにグリフヤ祭儀に *Bhūtas* 「その他多勢」と品定めされている。（注）シヴァ神は *Bhutesvara* であり、ヤクシャ神たちは屢々 *Bhūtas* と呼ばれる。この *Bhūta* は「（ヤクシャ）になった者たち」を意味するらしい。（cf. *mahievāṃsa ch. X. yakṣho-bhūta*（ヤクシャになった者たち））幾分後世の書物で彼らは病氣をもつ精霊であった。*Satapatha Brāhmaṇa* でクベーラはラークシャサ *Rakṣasa*、盗賊や悪業たちの棟領であって、彼こそ原初未開の神であったことを意味するとしてよい。經典にクベーラは結婚祭儀に夫としてイーシャーナ *Īśāna* と一緒に姿を見せ、子供の天然痘の軍勢を率いていた（ハリーティーは彼女の元来の性格に子供の天然痘神の役目であった）。（中略）クベーラすなわち *Kubera* (*Vaiśravaṇa*, *Vaiśramaṇa* また仏教文学では *Vessavaṇa*, *Pāncika*, *Jambhala* etc.) [注一、シャムブハラに対してはフッシエの、インドの仏教図像学、巻二、一二三頁、巻二、五一頁参照、彼の配偶神 *Sakti* は地母神 *Vasundharā* で、彼は八人のヤクシニーたちブハドラー、スブハドラーによって囲繞されているらしい]。（前掲書、巻二、八五頁）は四天王 (*maharājās*)、ないし八部衆天 *Lokapāla*（大地の統一者）時として帝釈天と^{インドラ}一緒に東方の守護神、そして全てのヤクシャ神の棟領でその場合の仇名は *Yakṣendra*. *Deva Yaksarāja* などである。クベーラは力と生産の神であって特に財宝希求神として信仰された。クベーラの住む都市 *Ālaka* はカイラーサ山の上（またシヴァ神の住居でもある）の豪壮な城壁をもつ町で、そこにはヤクシャ神

たちのみならず、キムナラ Kimnara、ムニス Munis、ガンダルヴァ Gandharvas、ラクシヤサ Rakshasas など
が棲んでいる。(中略)クベーラのヤクシャ眷属について吾々はたくさん学んでいる。彼らは或る型を備えた力をも
ち、女神たちは特に非常に美麗な女性で(若し地方の女神だとしても未知の美が要求される程だ)ヤクシーである。
彼らは親切でしかも守護神として激しい闘いができる(クベーラ自身は「宇宙の守護神」で、主として侍者、護衛、
門番としてヤクシャが仏教美術のなかに姿を見せる。」(前掲書、五—七頁)と。

ヤクシャー、ヤクシー、クベーラの姿を垣間見たわけだが、造形表現された限りの彼らの形姿は、豪華な装飾具を
身につけて王宮の王子、王女にも見誤うばかりの髪型服飾である。もちろん、クベーラは両手で大地を支えるギリシ
アのアトランティスの如く、短軀太鼓腹の力士然として門柱を支えていて、彼らの門番、守衛の職掌を示すのみで別
に武器甲冑その他の持物によって示されていない。脚下に邪鬼を踏み押えて臂力腕力を象徴するばかりである。がよ
く見ると、彼らの表情が正に古拙な芸術美に共通する、大きく見開いた杏仁型の眼や華美な宝髻、耳飾、瓔珞腕環、
釧、足環が飾られていて、手も合掌したりするだけで、印相にも攻撃成嚇の表現がない。眼や装身具が一種の邪視
の辟邪の役目を果していることに気付く。ヤクシーは豊満な乳房と大きく揺る腰、そして陰部を明白に表現して邪視
からの辟回を意図的に表現していることが分る。クベーラは重量を支える力士の表情そのままに、眼を瞋ぎ、鼻孔を
膨らませ、歯を喰いしばって大きく開けた誇張された面貌となっている。眼も鼻も口も邪視の対象として格好のもの
で完璧な辟邪の役目を果している。彼らは門神、護衛として剣や戟や戈を持たず、また決して甲冑を帯びない、まこ
とに戦士らしくない平和な形姿で、良く悪精靈や病魔の侵入襲来を防禦していることが知られる。紀元前二世紀から
後一世紀の遺構、遺物にみられる門神、守護神はこうした形姿で平和裡に守護の役目を果したのだった。

もちろんキストナ河(クリッシユナ河)流域のアマラヴァティー、ナーガルジュナコンダ、ジャガヤピータのスト

ウーパ遺蹟の場合⁽⁶⁾、ガンジス河流域からデカン高原の一部にかけての遺蹟と違って、それまでゴータマを人間形姿で表現しないで、法輪、菩提樹、仏足、ストゥーパの象徴物で彼の行動する形姿を暗示したり、また坐っているはずの台座のみ、また騎乗している筈の無人の馬といった省略表現だったものと、人間形姿のゴータマ像が混在しているの
で、このベンギー派の造形理念、また信者たちの身分や位置、工人たちの出自など違った視点から解析しなくてはなるまい。彼ら仏教徒信者の過半が、キストナ河川とベンガル湾からさらにインド洋から紅海へと雄飛したドラヴィダ系航海業者、貿易商人たちであったと考えると、その造形の秘密も解けてくる。が、クベーラや、獅子、象などが門神の役目を果している。その獅子がアッシリアからバビロニア、イランのアケメネス朝ペルシアに踏襲されてきた、門神、守護神の役目をかなり意識的に取り込んで造形されていたことが、アマラヴァティーの舗装石面に浮彫りされたストゥーパのミニャチュールからも確かめられよう。

ともあれ、門神、守護神がシュンガ朝、アーンドラ朝の仏教遺跡に天部として姿を見せている上、彼らが盗賊や悪業者の棟領から、逆に財福神となつて、これらを調伏教化する役目を荷い、不可思議、奇蹟を現出する者の守護靈となりトータムのマンゴー樹にぶら下り、またその樹下にあつて威力を発揮した姿が捉えられた。

四、執金剛神、ヴァジュラパーニとギリシア神

アレクサンドロス大王の東方遠征がインド世界に与えた影響は、彼の短期の滞在にもかかわらず、数多くの西方文化や習俗を置土産にして残してくれた。始めてのインド社会での統一国家マウルヤ王朝の出現を筆頭に、それまでのガンジス河粘土文明に、ギリシア・イオニア石造美術の流入、地中海世界の諸文明が貿易商人を通じてインド社会に

受容されたこと、インドの思惟とギリシアの思惟の対決を物語る、那先比丘經、彌蘭陀王問經の成立、そして今日のアフガニスタン、パキスタン、それにロシアトルキスタンに渉るガンダーラの地に、始めて仏像が成立し、菩薩像、それに天部像が造形表現されたことも、アレクサンドロス大王とその後のヘレニズム東漸現象の一つとして特筆しなくてはなるまい。

わたくしは中村元先生の「インドの思惟——ギリシアの思惟との対決」（昭和二十五年春秋社刊）を振りだしに W. W. Tarn; *The Greeks in Bactria and India*, 2nd Ed. Cambridge University press 1951. A. K. Narain; *The Indo-greeks*, Oxford at the Clarendon press. 1957. G. Woodcock; *The Greeks in India*, Faber & Faber. 1966, F. Altheim; *Welgeschichte Asiens in Griechischen Zeitalter*, 2 Bende. 1948. の諸冊を嗜読し、ギリシア文化東漸と大乘仏教成立への刺戟問題を考究してきた。ガンダーラ美術成立の大問題は恩師の一人でもある高田修博士の「仏像の起源」（昭和四十二年九月、岩波書店刊）に詳しい。ガンダーラ起源説と中インド・マトゥラー起源説を最近までの研究を網羅した大著でその帰趨を辿ることができる。この問題は現状の考古学知見では迷路に誘ひこまれるので、むしろわたくしは地中海世界から西アジアのヘレニズム・ローマ文化の東漸から、北西インド仏教の成立と展開、そして造形作品の比較検討を行ってきた。そして、アレクサンドロス大王の遠征に従って、葡萄酒文化、ディオニソス酒神の東漸、またギリシアの武力神ヘラクレス、ゼウス神の東漸問題に指を染めた。前者は未定稿ながら「ディオニソス信仰と葡萄酒の東方伝播」として「三笠宮殿下古稀還暦記念オリエント学論集」に掲げたことがある。また片鱗は拙著「仏像——仏教美術の源流——」（一九八四年六月、拍書房刊）第十一章異教の神々との出会い、八三—八九頁）にも触れておいた。

ガンダーラ彫像には単独像のほか、数多くの仏伝図が有名な燃灯仏本生図から託胎、誕生そして涅槃、舍利八分戦

争まで種々様々に造形表現された。それ迄のゴータマを人間形姿で表現できなかった禁忌^{タブー}が解けて、ギリシア哲学者の風貌を帯びて光背^{ニシツラス}を背に、種々の印相で行動様態を暗示しながら物語の図解、絵解き宜しく彫出された。サンチーやパールフト、アマラヴァティーの仏伝図の Anthropomorphology 版だっただけでなく、それまで決して存在しないゴータマの身辺を守護する、蓬髮裸形の電撃杵^{サントウキ}を手にする護法神が傍に侍立しているのである。その姿は或いは杵を右手にしたり左手に執ったりしているが、短かい禪裳^{ドクタイ}を穿いて立っている⁽⁷⁾。

さて、ヘラクレス神 Heracles, *Hercules* とあるが、William Smith; *Dictionary of Greek and Roman Biography and mythology* 3 vols. London, John Murray. 1845. によると、卷二の三九三〜四〇一頁に及ぶ記述があり、また高津春繁氏の「ギリシア・ローマ神話辞典」(一九六〇年二月、岩波書店刊)も二三五〜二四六頁にも渉る英雄伝説、武勇伝が語られている。スミス辞典によると、「古代の英雄のなかでもっとも顕著な神で、彼にまつわる伝承は事象が最も豊富であるのみならず、最も広範囲に拡まった」(前掲書、三九三頁)と言い、ウドコック Guge Woodcock も「アレクサンドロス大王が遠征軍を率いてバクトリアを下って、ヒンドウ・クシュの峠を越えた時、彼の麾下にあった住民たちがすでに、インダス溪谷を見渡す肥沃な山脈を占居している、二百年に渉ってインドとペルシア帝国そして小アジアのイオニア大都市とを結んでいた通商貿易路に沿って、ギリシア人は彼我往来してきたし、また彼らの旅行が伝説と豊かに育んで、——ギリシアの神に、ディオニソスとヘラクレスによるインド遠征譚といったものがあって、それがアレクサンドロスに影響を与えて、そこでインド征服に踏み出し、大洋を見出してヒンドウ・クシュを超えた果迄彼の世界を拡げたと信じさせるにいたった程だ。」(前掲書、十六頁)とも言っている。

ヘラクレス神が武勇をもつて種々怪獣を退治したことは、キタイローンのライオン狩り、ネメアのライオン退治、レルネーのヒュドラー(水蛇)退治、エリュマントスの猪生捕り、その他怪鳥、牡牛など彼の手にかかって殺された伝

説が数々ある。(高津前掲書、二二六―二三九頁)とくに彼が一撃の元に棍棒でライオンを打ち殺し、その生皮を剥いで身にまとい、頭を冑とした伝説は、西アジア世界の獅子狩りのもつ祭儀と悪霊ネルガルの使いとしての意義に附会されて、裸形雄偉なヘラクレスが棍棒を右手に、左手にライオンの生皮を下げる像として愛好されたとみえ、幾つかの石彫、銅造作品が残っている。とくにメソポタミア北部のバルティア時代の二重城廓都市ハトラには、その北門に守護神として安置されていた約二メートル余の像高をもつ像がある⁽⁶⁾。門の傍らの龕に置かれていて明らかに隊商都市ハトラの守護神の役目を果たしていたことが分る。惜しくも頭部を欠失しているが、棍棒と獅子の生皮を両手にした威風堂々たる勇姿を見せてくれる。沙漠の真只中にある隊商都市ハトラは円形の二重の城壁をもつ要塞で、ベドゥインウ遊牧民族らの攻撃に曝されていたと見え、守護軍神のヘラクレス信仰が盛んだと思われ、城内の遺跡から小像ながら五十駄以上も発掘された。その一例を青銅製約二七cmのヘラクレス像として図示しよう⁽⁶⁾。筋骨隆々とした裸形のヘラクレスで、市民の戸口か神殿前に奉納安置されていたものと考えられている。こうした紀元前後から数世紀に涉つてバルティア人が信仰したヘラクレス神は、一方で葡萄酒の神ディオニソスと習合したと見え、イラン高原のシルクロードの通るベヒトゥーンに醉態横臥する姿を留めている。棍棒を立掛け獅子の皮の上に寝そべて右手に葡萄酒杯を捧げる像である。この地はアケメネス朝のダレイオス大王の戦勝記念摩崖碑文のあるので有名だが、同時に駿馬と葡萄の産地として古代から有名な所であった。この像も王の道、交易路の守護神として造形表現されたに違いない。そして筋骨隆々たるヘラクレス、ないしディオニソスはガンダーラ彫像のなかで、ゴータマの守護神として棍棒から電撃杵、すなわち金剛杵をもった姿で侍立し、また収獲祭のなかで醉態を演じ美女と交歓し、人びとに支えられる酔どれ天使の姿を見せてくれる。

コーサンビー氏はクリシュナ信仰に触れたのちに、これらギリシア英雄神との関係に言及して次の様に指摘した。

「前四世紀後期にインドに侵入したギリシア人は、かれらのヘーラクレスとそのまま同一視したインドの半神半人に対する崇拜がパンジャブ平野の主な信仰であったことや、ディオニューソスが丘陵地帯で引き続き崇拜されていたことを見出している。このヘーラクレスがクリシュナは当ることは疑いない。このギリシア人の英雄では、日光で皮膚を黒く焼いた無双の競技者であったし、ヒュドラ（カーリヤのような多頭の蛇）を殺し、多くのニンフ（水の仙女）を犯したり、あるいはこれらと結婚している。さらに、クリシュナの死の模様については、インド神話よりギリシア神話の方でよく知られている。クリシュナの死んだのは、ジャラスという乱暴な狩人、実はかれの異母弟が射た矢がかれの踵に当たったためである。インド人は、なぜかかる傷が致命的になったのかいまだ理解できないが、アキレウスの物語や他の多くのギリシア神話では、このような奇妙な死はしばしば、殺された英雄の兄弟（または族長後継者）が使ったところの有毒の武器と関係がある祭式上の殺人であったに違いないことを示している。他方、ギリシア人が、征服者のディオニューソスとした他のインドの神は、シリグヴェーダを通じて、酒と戦いが強く狂暴にふるまったとその性格が記されているインドラ神以外に考えられない。このギリシア人の報告のもつ大きな重要性は、これまで見逃されてきたが、ヤドゥ族が絶滅したけれども、クリシュナ信仰がすでにパンジャブの最適の農業地帯からインドラ信仰を駆逐したことが示されていることである。インドラ・ディオニューソスは、その征服後に、鉄や諸金属の知識、農耕における雄牛の使用、家屋建築の方法をインドに最初にもたらしたのであるが。」（前掲書、一八〇—一八一頁）

わたくしはこのコーサンビー氏の提言をことさら重視したいのは、ヘラクレス、ディオニューソスが門神としての守護防禦の役目をもって、ゴータマの傍に侍立していたとしたが、その神格はインドラ（帝釈天）に移譲していた点である。ヴェーダ時代からの英雄神インドラは、明らかに仏教が包摂して決して駆逐されたものではなかった。ゴータマ仏陀の

護法神として転身したのだった。形姿はディオニソス、いやヘラクレスそのままで、元来ゼウスが持ちまたインドラの持物であった電撃杵を、そのまま彼が持つにいたったのだ。そしてそれはやがて金剛杵^{ヴァシシュタ}に変わってゆく。さらにこれから護法神は裸形から遊牧騎馬戦士の身にまとった甲冑を着用し、弓矢はもとより剣、槍、鉞、戈を佩びるにいたり、四方、八方、十二方と空間方を専門に守護するに到る。その造形化は遊牧民のクシャーン族に発するが、面白いことに唯一裸形筋骨隆々たるを誇示する密遮、金剛の二力士のみが、ヘラクレス・ディオニソス像そのままにシルクロードを東漸して、吾が日本の法隆寺の仁王門、東大寺仁王門に佇立守護の任にあたっている。

註

(1)

(1) 先日仏教大学においてロシアの仏教考古学者レーヴィン氏 G. M. Bongard Levin が、「ロシア領中央アジア仏教考古学の成果」について、多くのスライドを用いて講演されたことがあった。紀元前二世紀から紀元三世紀に渉る、中央アジアに活躍した Indo-Scythians, Sakas に触れた頗る興味深い報告であったのを来聴された人々も御存知だったに違いない。質疑応答の機会を与えられたので、わたくしはコーサンビー氏の論著の壘によって、ブッダがシャカ旅出身とする点に言及した折、レーヴィン氏はコーサンビーの論旨が単なる語呂合せからなる荒唐無稽の妄説と一蹴せられた。そして臨場の仏教学者もそれに賛同せられたのを御記憶の方も居られよう。わたくしはブッダの初転法輪がサルナートの鹿野園でなされた事実注目して、彼がシャカ族出身故にそのトーテム獣である鹿を飼育していた同族に、先ず教説の第一声を放った必然性のある点にも深い注意を払っていたのである。レーヴィン氏はインドに野生鹿が多く棲息していて別にシャカ族のみの特有独自の現象でないとしてわたくしの主張を一笑に付されたのであった。鹿について多少文献を渉猟し、奈良公園での鹿の生態に関心を払ってきたわたくしにとって、レーヴィン氏の所説に従い難い点が多い。あの席場でこれらの諸問題を論究するのは不都合と思われたので、何ら追究討尋しなかったに過ぎず、決して氏の所説に服したのでないこと勿論である。野生鹿の飼育し難いのは馴馴鹿が唯一の例外であること、鹿茸採集の業獮の方法と分布を考えてみるだけでも多くの問題を孕んでゐる。Berthold Laufer: The Reindeer and its Domestication, *Memoirs of the American Anthropological Association*, vol. IV, No. 2, April-June, 1917. ㊦㊧の種㊦の最高

の成果の一つであろう。そのなかで次のように言っている。

「飼育された鹿は古代インドの隠遁者たちによつて保護され飼われてもいた。仏陀が住居と定めていたラージャグリハ近くの鹿野園こそ仏教文学のあらゆる読者にはお馴染みである。インドの諸王は自らの王宮の西側に鹿のための特別な飼育園を持っていた由である。(注5、B. K. Sakar, *The Sukraniti* (Allahabad, 1914) p. 30)」(前掲書一三二頁)と指摘している。王宮西側の鹿園はこれもラウファール氏の指示する玄奘の「大唐西域記」巻一の千泉にあった突厥可汗が鈴鐺をつけた群鹿を愛玩して殺したりすると処罰した由の記事と符合する。鹿茸採集と祖霊獣としたのによると思われるが、カール・イェットマルの「中央アジアの送葬儀礼と動物文様」K. Jettner: *Mitelasische Bestattungsrituale und Tiersil*, *IRANICA ANTIQUA*, vol. VI, E. J. Brill, 1966, Leiden. のなかで「ロシアの民族学者、考古学者であるN. L. チュレノヴァ女史の「スキタイ風の鹿」の研究論文を引用して、サカ族は自分たちの氏族トテム獣の造形表現に、胴の下に両脚を折曲げて蹲る鹿の主題をもっていたこと、および「サカ族のサカという言葉が明らかに鹿という意味をもっている」といった主張を紹介している。(前掲書七頁)

レーヴィン氏はさらに紀元前五・六世紀にサカ族はいなかったので、ブッダがサカ族ではないと一蹴されたが、これは明らかに間違いであり、詳細は白鳥庫吉博士の「塞民族考」(『西域史研究』上、昭和十六年九月、岩波書店刊、四六三—六二八頁)に縷説されていて、有名なベルシアアケメネス朝のダレイオス大王のベヒトゥーン碑文中にサカ族とその造形表現がある点に言及されている。とくに「Herodotus の文から見ても又 Darius 王の碑文から考へても、此の時代に Saka の一種が Hindush の北で Tashkurgan と Bactria の間に拠つていたのは殆ど疑の無いやうである。然らば此の Saka は Naksh-i-Rustam の碑文にある三種の Saka の何れに該当すべきであるか。これは更に論証を要する問題であるが、此等の Saka は名称があるばかりで、その外何事も記されていないから、その方位を推定するのは甚だ困難である。」(前掲書四七七頁)とされているのを見ても、レーヴィン氏の回答は暴論という外ない。一步譲ってシャカ||サカが語呂合せとするならブッダの仇名のシャカは何を意味するのであるか。モニュエル・ウィリアムズの梵英字典に *Sakya* を、カピラ・ヴァストゥのクシャトリア族で地主の一種族の名とのみあつて、その意味に触れていない。Saka について皮膚の白い種族とあり、文字通り紀元前二〜後二世紀に北西インドを支配した種族で、レーヴィン氏の言うサカ族がこれである。加えて例のストゥーパの土饅頭型の墓の形式はサカ・スキタイ族のクルガン(高塚墳)に由来していると考えられる。

要するに *Sakya-muji* がヒンドウクシシュの北辺にいて、ネパール国境の一部カピラ・ヴァストゥに住居したサカ族としても、

決して牽強附会でなく、ましてコーサンビー氏の所説を民俗学的に宗教的に論難する多くの証拠と準備を要すると思う。さらにその妄想叢惑のナンセンスとする断定に服し難い。そして多くの教示を期待する。わたくしはコーサンビー氏の論及から引き出される問題に多くの関心と興味がある点読者はよくやられた。

- (2) Hermann Jacobi; *Die Entzückung des gottesidee bei den Indien und deren Beweise für das Dasein gottes*, Kust Schroder, 1923. 尚邦記あり。

- (3) アシエーカ王の治世と事蹟について Vincent A. Smith; *Rulers of India Asoka The Buddhist Emperor of India* Oxford u. p. 1901 があり、戦後には Romila Thapar; *Asoka and the Decline of the mauryas*, Oxford u. p. 1961 がある。

- (4) サンチーの塔について John Marshall and Alfred Foucher; *The monument of Sanchi*, 3 vols. があり広輪大著によりその簡略案内書に John Marshall; *The guide to Sanchi* があり便利、また「世界の文化遺跡シリーズ」のインディヤ篇にもサンチーの紹介がある。

- (5) パールプットの塔欄楯について N. G. Majumder; *A guide to the Sculptures in the Indian Museum*, Part I. Early Indian Schools. Delhi, 1937 があり概説本として便利、また書に Ananda K. Coomaraswamy; *La Sculpture de Bharhut*, Vanoest, 1956 があり、コローティン版図録として作品を網羅している。解説の詳細をきかめつつ。邦文としては「世界の美術館シリーズ」の一冊「カルカッタ美術館」(編者上野照夫、一九七〇年三月講談社刊) 14～20 図 49～53 図(単色)にパールプット彫刻がわたくしの解説で紹介されている。

- (6) アマラヴァティーとジャガヤペーターの塔趾の初期の報告に Jas Burgess; *The Buddhist stupas of Amaravati and Jagga yabeta in the Krishna District*, Medras Presidency, surveyed in 1882. London, Trübner Co. 1887 があり、實録書の一冊。戦後にはベニス美術館紀要の一冊として C. Sivaramamurti; *Amaravati Sculptures in the madras government museum*, *Bulletine of the madras governmentmuseum*, new series general section vol. IV. madras, 1956 があり、トムヴァティー彫刻は大英博物館に数多く收藏されていることを調査したことがあがり、その図版目録が出版されている。Douglas Barrett; *Sculptures from Amaravati in the British Museum*, The trustees of the British museum, 1954. があり様式研究書として Philippe Stern et Mireille Bénesti; *Evolution du style Indien d'Amaravati*, Presses universitaires de

France, 1961. も教唆するところの多い書物である。

- (7) Harald Ingholt; *Gandharan art in Pakistan*, Pantheon Books 1957. の図版番号 54、バラモン僧との初会見図に仏陀の背後に立つ電撃杵をもつ蓬髪の守護神、55成道座のために仏陀に奉獻する草刈人の図にも蓬髪髻のある執金剛神像、75初転法輪図にビウス神めく執金剛神像、99 仏陀と執金剛神と信者、100 シュリーグプタの婦依図、137 涅槃図、188 仏陀の婦人婦依者たちにもヘラクレス、ビウス神の執金剛神が表現されている。381 382 383 384 385 386 に筋骨隆々たるアトラス神の種々な姿態がある。392 河伯の神像

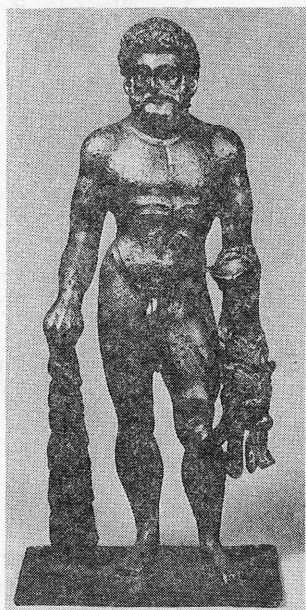
- (8) 一九七四年に開催された「古代メソポタミアの秘宝、ティグリスユーフラテス文明展」にこのヘラクレス像が陳列された。

161 ヘラクレス立像がそれで、図版解説も参照のこと。わたくしもハトラ遺跡でこの像のあった門傍の龕を実見した。

- (9) 前掲カタログ 113 号。



ブッダと執金剛 (ペシャワール博物館)



ヘラクレス立像 (イラク国立博物館)



ブッダと執金剛 (ベルリン博物館)